

編集後記

臨床文藝医学会編集室

2023年9月の臨時理事会の話し合いの結果、NPO法人は解散することになり、12月の臨時総会で最終的な決議となった。役員が多忙や中枢を担う役員の不在、NPO法人でなければならないような活動が今のところできていないこと、等々が理由である。

この雑誌については、オンラインジャーナルとしては年一回の発行を継続できればと思っている。紙媒体でも出すかどうかはその時の私の懐具合と相談になるだろう。

大文字の文学や哲学に飽き飽きしている、うんざりしている、世に出回っている出版物には何か物足りなさを感じる、という人は少なくないだろう。未完成でもいい、荒削りでいい、むしろ作り物めいた、書割のような作品はもう見たくない、という人は案外多いのではないか。

それでは作者はいいほうがいいのか、完全にコントロールを手放したほうがいいのか、自動記述が至高なのか、等々。

今回特集したAI×医療×アートでもそのような話題に触れている。作者がコントロールを手放さずに書いたもの、最小限に自我を抑え込みコントロールをあえて手放すように書いたもの、いずれがよいか、よくないか、といった議論にはさほど面白味もない。自我を抑え込むという配慮もそれ自体がつまらない。

ある作品に価値や意味を与えるのが批

評家の仕事の一つと言えるだろうか。しかしそれは私たちの仕事ではない。世に出れば、価値や意味は必然的に付与される。おおかた付与された意味や価値には私たちはうんざりさせられる。意味付けは関わりの中で更新される。この作業に終わりはない。あえていうなら私たちの作業は留保をつけるということかもしれない。批評家が定位するとすれば、私たちは留保する。市井の人の言葉と偉人の言葉を同列に並べシャッフルさせる。世には出てこない多くの言葉がある。歴史にならない多くのことがある。存在しない多くのものがある。ソアレスは存在するものだけではなく存在しないものへの倦怠を書いた。それは可能性への不安と一続きだろう。可能性そのものは消せないということ。

だから留保といいながら、断定するときの私たちの態度は表面上留保をつけているようにはみえない。書かれたものはそれを語らない。断定調の断章に躊躇いを読み取るかどうか、おどけを真に受けるかどうか、冗談を狂気ととるかどうか、深刻の語りを軽薄ととるかどうか、模倣の道化を生真面目ととるかどうか、冗談を怒りと取り違えるかどうか、フィクションをフィクションだけととるか、比喩だけととるかどうか、それは読み手に委ねられている。神田橋條治は精神分析学の「投影性同一視」とはつまり「下司の勘繰り」だという。てめえの身の丈で考えるなよ、ということだろう。それが留保ということだろう。(2024.6.2)